



TITLE:

爲替心理說評價(二・完)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 爲替心理說評價(二・完). 經濟論叢 1933, 36(6): 935-958

ISSUE DATE:

1933-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130323>

RIGHT:

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第六號

第三十六卷

昭和八年六月一日發行

論叢

唯物史觀の第三史觀への接近……………文學博士 高田 保馬
我國の國民所得……………經濟學博士 沙見 三郎
爲替心理說評價……………文學博士 米田 庄太郎

時論

異常所得の課税……………法學博士 神戸 正雄

研究

フランスにおける爲替動搖と安定策……………經濟學博士 谷口 吉彦
わが國^{に於ける}の百貨店出張販賣の發展……………經濟學士 堀 新一

說苑

ナダム・スミスに於ける經濟史觀……………經濟學士 白杉 庄一郎
英國に於ける預金の流通速度……………經濟學士 大野 榮一郎

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十六卷總目錄

（禁 轉 載）

爲替心理說評價 (二・完)

米田庄太郎

一、高田博士の價格の勢力說評價(前號)

二、アフタリオン教授の爲替心理說評價

二 アフタリオン教授の爲替心理說評價

アフタリオン教授の著書「貨幣、物價及び爲替」(Alfalion, Monnaie, prix et change, 1927)は、世界大戦争が始まる千九百十四年から、千九百二十六年に至るまでの貨幣、物價及び爲替の最近の歴史を先づ佛蘭西に就て、次に歐洲諸國に就て詳細に調査し、研究し、其等の現實なる經驗的事實に照らして、傳來の及び世界大戦争後勢力を振ふて來た貨幣の理論及び爲替の理論を批判し、そして其等の經驗的事實に適合する、或は夫れによりて驗證されて居ると認め得られる、新しき貨幣の理論及び爲替の理論を構成せんとするものにして、純粹なる科學としての一切の社會科學に於て、經驗的事實を大に尊重し、夫れに適合しない、或は夫れによりて驗證されない理論は、哲學的に如何に深奥であり、又論理的に如何に精妙であつても、社會科學的理論としては價値少なきものと考へる吾々にとりては、甚だ興味深き、又有益なる著作である。私は本論文に於

ては、さきに述べし主意に従ふて、主として同教授の爲替心理說を評價せんとするだけであるが、併し夫れは同教授の貨幣心理說と同一の原理に基いて構成され、且つ之れと甚だ密接な關係を有するものであるから、先づ同教授の貨幣心理說の根本思想を極簡単に述べて置きたいと思ふ。

アフタリオン教授は千九百十四年から千九百二十六年までの佛蘭西及び歐洲の主要諸國の貨幣、物價及び爲替の變動を五期又は六期に區別して詳細に調査し、そうして其の最近の經驗に照らし、先づ貨幣の理論を批判的に考察し、貨幣分量說を排斥して、貨幣所得說 (*la théorie du revenu*) を唱へ、更に進んで貨幣心理說を主張して居るのであるが此處に其の根本思想を簡単に述べて置く。

アフタリオン教授は先づ貨幣價格の決定に於ける質的諸要素と量的諸要素との區別に注目し、貨幣分量說の如く量的諸要素のみを偏重することの正當ならざる所以を明かにし、次に貨幣理論の心理的基礎として、第一に貨幣に固着する質的諸要素を詳しく分析して居るが、其の中で特に重要視して居るものは、交換に於ける個人の要求の種々性、貯蓄の性向、及び豫見 (*provisions*) である。夫れより同教授は貨幣價格の變動に於ける質的諸要素、殊に豫見の演ずる重要な役目を論究して、左の如くに總括的に論結して居る。

「されば最近の經驗は、貨幣の事柄に關して、心理的諸因素の重大なる役目を明かにして居る、或は寧ろ憶ひ起させる、(と云ふのは同じ教示はより古い事實からも引き出し得られるからである)。そうして爲替の變動、貨幣の外部的價值の變動に關しては、此の役目は今日では何人も其の力を見損じない程の明亮さを以て現はれて居ると思はれる。併し貨幣の内部的價值に關しても、物價の決定及び變動に關しても、最近の經驗、殊に爲替によりて起る物價の運動は、同一の教示を與へて居るのである。一定の場合に於ては、屢々貨幣流通の豫めの變化も、直接の變化もなしに、爲替の作用が物價の上に行はれる仕方は、分量說を放棄し、所得說の如き一の理論を採用す可く吾人を誘致する。そうしてかゝる理論は貨幣の價值の支配的因素として、流通する貨幣の分量と云ふ外部的事實ではなく、所得の重要性を基礎とする個人的評價を強調するものであるが故に、既に甚だ心理學的であるのである。併し爲替の作用が、他の場合即ち夫れが貨幣流通の豫めの新しき増加も、所得の豫めの新しき増加

さへも起らずして、物價の直面の運動、貨幣の直接の内部的下落を決定するに至るが如き場合に於て、物價の上に行なはれる仕方は、純心理的諸因素、純質的諸因素、主として信ずることや、豫見によりて影響されて居る心理的秩序の變化に、更により重要な地位を與へる貨幣の心理學的理論に吾人を導くのである」。

p. 224—225

アフタリオン教授は以上述べし如くに、貨幣心理説の根本思想を一般的に論述したる後、更に價値の一般的理論に結び附けて貨幣心理説を詳しく論述して居るが、先づ價値及び需要供給の法則の近代的概念が、貨幣論に於て忘却されて居ることを指摘して、此等の概念の貨幣論に於ける重要性を強調し、次に貨幣心理説を三段に分けて約説して居る。即ち第一段に於ては市場に於ける貨幣の價格が、供給曲線及び需要曲線により決定されるものなるを論じ、第二段に於ては個人に對する貨幣價値及び其の心理學的基礎を論究し、第三段に於ては貨幣價格の變動の諸因素、爲替及び貨幣流通の影響を論究し、更に信用及び夫れの循環的變動の影響、物價の安定等を論究して、貨幣の一般的理論は信用及び銀行的インフレーション及びデフレーションの役目や、週期的恐慌、經濟的循環の理論と結び附いて居るものなるを明かにし、終りに左の如く述べて居る。

「併し何れの理論の精練に於ても、事實が暗示して居るのは、屢々統計的觀察が暗示して居るのは、最後の分析に於ては吾人の慾望に、吾人の信に、吾人の恐怖或は吾人の希望に、つまり心理的諸因素に訴へて、完全なる知識或は理解を求めると云ふことである。總ての場合に於て、貨幣に關しては、最近の貨幣的經驗が當然に吾人を導いて行くと思はれるのは、上に述べしが如き一の理論、一の心理學的理論へである。そうして此の心理學的理論は、既に述べし處によりて明かなる如く、價値或は需要供給の法則の近代的概念と調和を保つて居ると同時に、特殊の場合のあらゆる種々性にも適合するのである」。

p. 246

アフタリオン教授は最近の貨幣的諸經驗に基いて、先づ以上述べ來りしが如き貨幣心理説を築き上げ、次にヤハリ最近の貨幣的經驗に基いて、爲替心理説を築き上げて居るのであるが、其の根本的思想は貨幣心理説と一般的に共通して居るものである。

今アフタリオン教授は、最近の貨幣的諸經驗に照らして批判的に考察することによりて、今日一般に行はれて居る主要なる爲替理論、即ち國際貸借勘定説、爲替理論としての貨幣分量説、及

び購買力均等說等は、何れも其のまゝでは正當と認め得られない所以を明かにしたる後、爲替心理說を確立せんと企だてて居るのであるが、其の爲替心理說なるものは、要するに「國際貸借説は爲替の量的諸因素の方面から説明を求めるが、併し總ての量的諸因素を活用して居ない、又購買力均等説は爲替の質的諸因素を重要視するが、併し總ての質的諸因素を活用して居ない。されば其等兩理論を融合する一層廣大なる一學說、即ち只其等兩理論を完全に包括するだけでなく、更に其等兩理論を合せたよりもより廣大なる一學說、只國際貸借の勘定及び購買力の均等に訴へるだけでなく、更に其等兩理論が看過して居る一切の他の量的及び質的諸因素にも訴へんとする一學說を築き上げて、以て一の完全な説明に到達せんとするもの」であるのである。そうして同教授は右に述べしが如き主旨の爲替心理說を、先づ紙幣國の爲替に就て築き上げんと企だて、此處に同教授は爲替の心理學的基礎として、先づ個人的評定或は評價 (*les estimations individuelles*) を論究して居るのであるが、夫れは私が私の社會學上から見て、同教授の爲替心理說を批判せんとするに當つて、最とも重要視せんとするものである。

アフタリオン教授は個人的評定を先づ質的方面に就て考察して居るが、其の論ずる處によると、紙幣國の爲替に對して基本的な問題は、吾々は何故に外國の有價證券、つまり外國の貨幣に對して、一定の代價を拂ふことを承認するか、又吾々が拂ふ可く承認する其の代價は何に依存するか、換言すれば外國の有價證券の基礎は何であるかと云ふ問題である。そうして吾々が外國の貨幣に對して拂ふ可く承認する代價は、要するに吾々が夫れから期待する所のものに依存するのである。然るに外國貨幣は內國貨幣によりて獲得されねばならぬものであるから、かくて吾々が外國貨幣に對して拂ふ可く承認する處のものは、吾々の各々が兩貨幣から期待する處のもの、關係に依存するのである。

吾々が外國貨幣から期待するものは、確かに購買力であり將る。併し輸入者の最も多くに對しては、彼等が得んとする購買力は、外國に於ける物價の一般的水準から生ずるが如き、外國貨幣の一般的購買力と同じものでない。此處に問題となるのは特殊購買力、特定の商品を獲得する購買力にして、かくて外國證券の評價は、内國と外國との物價の一般的水準の差異に依存するのでなく、人々が獲得せんとする其の特定の生産物の内國と外國との價格の間の差異、或は原料品の外國に於ける價格と、人々が夫れで製造せんとする生産物の内國に於ける價格との差異に、依存するのである。

外國貨幣の一般的購買力と、特定生産物の相對的購買力、或は特殊購買力、是れ外國證券の個人的評價に既に入り込んで居る二つの質的要素である。併し其の外の多數の質的諸要素も之れに加はつて居る。要するに外國貨幣に對する個人的評定は多數の質的要素によりて制約されて居るのである。

次に外國貨幣の個人的評定は又量的諸要素にも依存する。そうして此の評定に於て人々の關心するのは、夫れ自身に於ての外國貨幣ではなく、人々が獲得せんとする特定の諸單位の各々、例へば各ドル、各磅から期待し得るものである。そうして人々が單位の各々から期待するものは、單位の數が増加するにつれて重要性を減する。効用遞減の法則は此處にも適用される。かくて各人に於てドルの増加する分量に照應する評定の遞減するスケール、ドルの單位の増加する分量に照應する需要價格の減小する曲線が成立する。併しスケールの各度、曲線の各點に於て、人々が照應する單位の數に對して拂ふ可く承認する價格は、人々が最後の單位から期待するものに依存する。

需要曲線は諸個人に於て、彼等の慾望、彼等の慾求、彼等の資力、彼等の豫見、彼等の投機的精神、彼等の貯蓄心或は彼等の冒險心等に應じて、種々異なつて居る。夫れは又瞬間瞬間に變はつて行く。併し各個人にありては、又各瞬間に於ては、彼の外國貨幣の評價は彼が獲得する夫れの單位から期待するものに、依存するのである。

各個人に對する外國貨幣の價格の基礎は以上述べしが如きものである。そうして此の基礎の中に、かの商品の價格の中に効用及び稀少性が入り込む如く、質的及び量的諸要素が入り込み、且つ相結合する。併し量的與料は只最後の單位、即ち夫れの評定が決定的であるであらう處の最後の單位は、如何なるものであるであらうかを確定する爲めにのみ干涉するだけであつて、かくて或意味に於ては、人々は其の根柢に於て只評定、即ち一切の商品の價格の最根本的基礎であると同じく外國貨幣の價格の最根本基礎である處のものを、見出すだけであると云ひ得るのである。

人々は現代貨幣的經驗の光りに照らして、爲替の問題に於ては心理學的因素と稱せられて居るもの、信用或は信頼や、豫見

などの甚だ重要なるを屢々強調して居る。併し爲替は個人的評定。つまりは最後の單位の評定に於て、夫れの基礎を有するものであるから、吾人は爲替の理論全體は一の心理學的理論であると、考へ得るのである。p. 290—295

アフタリオン教授は以上述べし如く先づ爲替の心理的基礎の究明によりて、爲替の理論は本質的に心理學的である可き所以を明かにして居るが、夫れより次に市場に於ける爲替の價格、或は與へられたる瞬間に於て確立される爲替の唯一の時價或は相場は、如何にして決定されるかを論究し、(p. 296—305)次に爲替の變動の諸因素を論究して(p. 306—328)以て紙幣國に於ける爲替に就て、爲替の心理學的理論を大成し、更に夫れより重要なる種々の差異を認めねばならないに拘らず、同一の心理學的理論が金貨國に於ける爲替にも本質的には適用し得られることを論究し(p. 329—344)終りに價值の一般的理論と爲替の心理學的理論との關係を(p. 344—347)論述して居る。

アフタリオン教授の爲替心理說に就て、私が右に述べし其の理論的基礎及び一般的輪廓以上の詳細な點に關しては、さきに舉げし谷口博士の本雜誌昨年十二月號の論文中に述べられて居るから、此處では重ねて述べることを省いて置く。併しアフタリオン教授の爲替心理說は、只爲替現象を心理學的に説明せんとするだけに止まるものでなく、更に深大なる理論的意義を有するものなるを示す爲めに、同教授が最後に論述して居る價值の一般的理論と爲替心理說との關係の概要を左に述べて置く。

今爲替の理論の研究は、貨幣の理論の研究と大なる平行線を畫いて居る。そうして爲替に對しても貨幣に對すると同じく、最近の貨幣的事實と矛盾する支配的諸理論は、多くの點に於て又價格或は需要供給の法則の近代的概念からも遠ざかつて居る。併し又其等の近代的概念を遵奉することが、多くの人々に於て、全體としては價格或は需要供給の時代後れの公式を適用せるものに過ぎない古い爲替說を、頑固に保持するを妨げて居ないと云ふ様な事態が、屢々現はれて居る。さはれ爲替の基礎と價格の一般的基礎との間の必然的合致に頓着しない様な理論は、當然不完全であらねばならぬ。そうして論理的推論が強制し得

なかつた爲替の特殊的理論と價格或は物價の一般的理論との此の調和化は、今や爲替論に於ても、貨幣論に於けると同じく、最近の貨幣的經驗によりていやをなしに成就されて來た。尙ほ爲替に關しては、恐らくは總ての他の問題に關してより以上に、今や人々は只價格及び物價の近代的諸理論の本質的緯絲を構成する心理學的諸原理に遡ることによりてのみ、複雑な、變はり易き現實を説明しつゝあるのである。

さきに述べし如く、爲替に關しても貨幣に關すると同じく、吾々は事實に導かれて三段の説明を試みた。即ち第一段に於ては、市場に於ける爲替の直接法則として、物價のスケールに接合されたる需要供給のスケールとして解されたる需要供給の均衡を究明し、第二段に於ては、爲替即ち外國貨幣の價格の基礎として、又此の價格の個人的評定の基礎として、各個人が外國貨幣の最後の單位から期待する満足を究明し、第三段に於ては右の爲替の基礎、并に需要及び供給の曲線に作用する總ての因素、國際貸借勘定、貨幣流通、國家の政策及び豫見等を論究した。總て此等の諸段に於て、量的諸因素と質的諸因素、稀少性と評定、外部的現象と心理的動機とが相結合されて居る。かくの如くにして吾々は此處に、一切の經濟的理論の欲求する統一性と、何れの經濟學的理論に於ても必要なる事實との合致とを和合したのである。

兩者何れも最近貨幣的經驗の教へから成熟せる果實として、此處に呈出されたる貨幣の心理學的理論と爲替の心理學的理論とは、是まで論じ來れる處によりて明かなる如く、貨幣及び爲替の性質によりて必要となる適當なる制限を加へて考ふれば、價値の近代心理學理論に甚だよく適應してゐるのである。尙ほ價値の近代心理學的理論は、右の兩理論ともつまりは貨幣及び爲替に於ける夫れの單なる應用に外ならないものと思はれる程の大なる光りを、經濟學の他の多くの諸問題の上にも投じて居るのである。p. 344—347

却說簡單ながら以上述べし處によりて、アフタリオン教授の爲替心理說の理論的真義は如何なるものであるかは、大體上明かに學び得られると思ふ。要するに夫れは、同教授が價値の近代心理學的理論と認める限界效用說を、最近貨幣的經驗の光りに照らして爲替現象の研究に適用し、之を心理學的に精妙に説明せんとするものである。かくて同教授の爲替心理說なるものも、根本的には只價値原理のみによりて、爲替現象を究明し盡くさんとするものに外ならないので、經濟

學理論の方法論上より見れば、高田博士が價格の勢力説に於て價值原理の外に勢力原理を認めて、之を大に強調されて居るのに比して、一步劣れるものと云はねばならないかと思はれる。併し詳しく吟味して見ると、アフタリオン教授は、高田博士が勢力原理の中に、さきに述べし如くに、私が價值原理及び勢力原理の外に第三原理として認めんとするものの一、即ち私がヤハリさきに述べしが如き意味にて、タールドの説を根本的に修正して確立し、摸倣原理と稱せんとするものを、混交されて居るよりも以上に、價值原理の中に摸倣原理を混交されて居ると思はれる。そうして其の事がつまりアフタリオン教授の爲替心理説をして、微妙な色彩を發揮させ、或は微妙な香氣を發散させて居るのであるまいかと思はれる。併し私は經濟學理論の方法論上から見て、高田博士が勢力原理の中に摸倣原理を混交し、兩者を判然區別されないのは分析不足と考へると同じく、アフタリオン教授が價值原理の中に摸倣原理を混交し、兩者を判然區別されないのも、ヤハリ分析不足であると考へる。尙ほ同教授が勢力原理を一の獨立な原理と認められて居ないのは、高田博士に比してより多く分析不足ではあるまいかと思はれる。要するに私は高田博士が勢力原理中に混交されて居る摸倣原理を、勢力原理から引き出して勢力原理を純化すると同時に、摸倣原理を一の獨立なる原理として精練することが肝要であると同じく、アフタリオン教授が價值原理中に混交されて居る摸倣原理を、價值原理から引き出して、價值原理を純化すると同時に、摸倣原理を一の獨立なる原理として精練することが肝要であると考へるのである。

今アフタリオン教授が爲替心理説に於て根本的な心理的因素と認められて居るものは、さきに述べし處によりて知られる如く、同教授が個人的評定とか、個人的評價とか稱せられて居るものである。そうして同教授が個人的評定とか、個人的評價とか稱せられて居るものは、其の名稱によりて明かに察知される如く、私が社會的價值判斷作用或は社會的評價作用と稱して居るものの一種と、認めらる可きものである。併し同教授が個人的評定とか、個人的評價とか稱して居るものを、具體的な場合に就て詳しく吟味して見ると、夫れは決して私が純粹な意味にて、社會的評價作用と稱して居るが如きものでなくして、種々なる度合に於て、私が摸倣作用と稱して居るものを混交して居るものであることが觀破される。此處に私は此の事を、同教授が其の著書中に言述されて居ることを一々吟味して證明したいと思ふが、其の暇はなくなつたから、讀者自から同教授の著書に就て、之を試みられんことを切望して置く。そうして此處では私が摸倣作用とか、摸倣原理とか稱するものを、本雜誌本年二月號の拙稿に於て述べし以上に、紙面の許す限り稍々詳しく論述して、私が價值原理及び勢力原理から區別される可き一原理として摸倣原理を重要視する所以や、又夫れが價值原理とも亦勢力原理とも混交され易き所以、換言すれば夫れが價值原理中に攝取され易き所以や、又勢力原理中に攝取され易き所以を明かにして、アフタリオン教授の爲替心理説の眞義と共に、高田博士の價格の勢力説の眞義を評價して置きたいと思ふ。

私は本雜誌本年二月號の拙稿中に述べし如く、純科學としての社會學及び其他一切の社會科學

に於て、一切の社會的現實態或は社會現象を究明する根本原理は、私が今日までに到達した所では少なくとも三つあると考へ、其の一は價值原理、其の二は勢力原理、其の三は私が前二者に對立させて廣く不反省的原理と稱せんとするものであると認める。併し此處では只不反省的原理に付て、少し詳しく論述するだけに止める。

私はさきに述べし如くに、私が不反省的原理と總稱するものを、更に根本的に二種に大別する。其の一は一の心が他の心から與へられたる刺激、即ちやや具體的に云へば表象、觀念、感情、意慾、行動等々を、不反省的に其の儘に受容する作用、私がタールドの模倣の概念を適當に制限して規定したる意味にて、模倣作用と稱せんとするものに即して立てられる一原理、私が便宜上模倣原理と稱せんとするもの、其の二は一の心が他の心から與へられたる刺激を不反省的に其の儘に排斥する作用、私が不反省的排斥作用と稱せんとするものに即して立てられる一原理、私が便宜上不反省的排斥原理と稱せんとするもの。此の私が不反省的排斥作用と稱するものは、タールドを始め其他の何れの社會學者も、まだ公式化しては確立せんと企だてなかつたものにして、私が不反省的原理と總稱するもの全體を論述するに當つては、私の大に重要視して論述して居るものであるが、併しアフタリオン教授の爲替心理説を方法論的に評價せんとするに於ては、直接に重要な、此の不反省的排斥原理ではなくして、不反省的受容原理、即ち私が模倣原理と稱して居るものであるから、此處では只後者に就て論述するだけに止める。

今私は模倣作用を更に單純模倣と優勝模倣とに區別するに准じて、模倣原理をもヤハリ單純模倣原理と優勝模倣原理とに區別したいと思ふ。但し此の區別は模倣の兩極に於ては判然立て得れるが、併し其の間には無限な段階が存在するので、具體的な模倣に就て兩者の何れに屬するかを、判然決定し得られない場合は少なくない。要するに此の區別は論理的理想典型上の區別であるのである。

私が單純模倣と稱するものは、一の心が他の心から與へられたる刺激を、不反省的に其の儘に受容することを意味するので、暗示心理學に於ては、暗示感性の發動する最とも顯著な、或は單純な場合として研究されて居るもの、又精神病學にありては、精神傳染の顯著な、或は單純な場合として研究されて居るもの、又催眠術の研究にありては、催眠現象の單純な場合として取扱はれて居るもの、かくて其の實例は其等の科學上の著書論文の中に、無數に見出し得られるものである。併し暗示心理學者や、精神病學者や、催眠術研究者は、一般に暗示現象、或は精神傳染現象、或は催眠現象、即ち私が廣く模倣現象と總稱せんとするものに於て、私が立てんとする單純模倣と優勝模倣との區別を承認せず、兩者を雜然混交して居ると思はれるのであるが、私は少なくとも原理的には、兩者の間に一の重要な差異を認めて、兩者を區別することが理論上甚だ肝要であると考へるのである。

私が單純模倣から區別して優勝模倣と稱せんとするものは、外部的に見れば別に單純模倣とは

異ならないものの如くに思はれるのであるが、併し内部的に分折すると、其の間に重要な差異があることが發見される。此處で詳しく兩者の差異を論述して居る暇はないから、只一般的に論述するだけに止めるが、要するに私の考へる處によれば、單純摸倣にありては、一の心或は有心物が他の心或は有心物から與へらるる刺激を、一定の條件の下で不反省的に其の儘に受け容れるに當つて、即ち單純に摸倣するに當つて、其の刺激を與へる他の心或は有心物に對して豫め全然何等の考へをも抱いて居ない。そうして一定の條件さへ具はれば、刺激を與へる他の心或は有心物の何たるやを問はず、夫れから與へられたる刺激を、不反省的に其儘に受け容れる、即ち單純に摸倣するのである。然るに優勝摸倣にありては、夫れと異なりて刺激を與へる他の心或は有心物が、豫め全般的に又は特定の方面に於て優勝性を認められて居る、そうして夫れが爲めに、其の心或は有心物の與へる刺激が、無批判的不反省的に其儘に摸倣されるのである。是れ私が此の種の摸倣を單純摸倣から區別して、優勝摸倣と稱せんとする所以である。要するに優勝摸倣にありて、一の心或は有心物が他の心或は有心物が與へる刺激を、不反省的に其の儘に受け容れるのは、是れ刺激を與へる他の心或は有心物に、豫め優勝性を認めて居るが爲めであるのである。かくて優勝摸倣は價值判斷或は評價と直ちに混交され易いのである。併し此の問題に就ては後に論ずることとして、此處では私が優勝摸倣と稱するものは、とにかく單純摸倣から區別されて、一般的には右に述べしが如きものを意味すると認めて置いて、更に稍々詳しく説明を之れに加へ

て置きたいと思ふ。

私は本雜誌本年二月號の拙稿中に述べし如く、一切の社會的現實態或は社會現象の元素的事實は、心と心との相互作用及び相互關係であるとするのであるが、今此の相互作用及び相互關係は、原本的には二つの心或は有心物或は人間の間に行はれ、又構成されるものであると考へるので、かくて私は心と心との相互作用及び相互關係の原本的形式を、二心形式(或は二心關係)、對形式(或は對關係)、二人形式(或は二人關係)と稱せんとするのである。但し私の見る處によれば、近來獨逸の社會學界に於て Von Wiese 一派の人々や、Theodor Geiger などが Beziehung の一形式として重要視して居る das Paar なるものは、私の對關係或は二人關係と稱するものの一の特殊な形態を意味するものであるので、私の立場から其等の人々の所説を批判し評價する事は、興味ある一問題であると思ふが、此處では之れに論及する暇はない。

私は右に述べし如く、心と心との相互作用及び相互關係は原本的には二人關係或は對關係に於て行はれ、又構成されるものと見るのであるが、併し心と心との相互作用及び相互關係は、複雑なる發達を成就するに隨ふて、種々なる形式に於て現はれてくる。そうして私は特に優勝模倣に關しては、一般的に之を左の四形式に大別したいと思ふ。

- | | |
|-------------|-------------|
| (1) 個人的優勝模倣 | (2) 集團的優勝模倣 |
| (3) 場所的優勝模倣 | (4) 時代的優勝模倣 |

個人的優勝摸倣と云ふは、つまり一の心或は一個人が、全般的に又は何れかの特定の方面に於て他の個人に優勝性を認め、そうして夫れが爲めに其の個人が與へる刺激を、不反省的に其儘に受容すること、即ち摸倣することを意味するものにして、例へば生徒が學識又は人格に於て優勝性を認めて、尊敬する先生の云ふ事又は爲す事には、何等の批判をも加へず、不反省的に其の儘に之を摸倣するが如きものである。同様な事態は宗教家と信者との間や、人格者と其の崇拜者との間に於ても見出されるので、私は一般に無言の感化とか、人格的感化とか稱せられて居るものの大部分は、つまり優勝摸倣の結果を意味するものと解して居るのである。

集團的優勝摸倣とは、優勝性を認められたる一定の社會的集團、例へば一定の身分とか、一定の階級とか、一定の職業人とか、一定の専門家とか云ふが如き、一定の社會的集團内に於て汎く行はれて居ることが、社會一般に對して刺激として與へられる場合、或はかかる社會的集團が推賞するものとして社會一般に與へられたる刺激が、社會一般によりて何等の批判も加へられずに、不反省的に其の儘に摸倣されることを意味するものである。例へば身分的社會にありては貴族は最とも優勝なる身分として尊敬されて居るから、何んでも貴族間に行はれて居ることは、單に貴族的なものであると云ふ理由のみで、何等の批判反省をも加へられずに、其の儘に町人及び其他の身分の人々によりて、許されたる範圍内に於て出来るだけ、又は多少様式を更へて摸倣されて居る。又階級的社會にありては始めは所謂ブルジョア階級が優勝なる階級として尊敬されて居に

から、何んでも其の中に行はれて居ることは、只夫れだけの理由によりて無批判的不反省的に其の儘に、他の諸階級によりて摸倣されて居る。然るに近來勞働者階級が段々に優勝性を認められるに至つて、勞働者階級間には所謂ブルジョア階級内に行はれて居ることは、單に夫れだけの理由によりて排斥され、即ち私が劣惡排斥と稱する作用が行はれてくると同時に、又勞働者階級内に行はれて居ることは、單に夫れだけの理由によりて、無批判的不反省的に其の儘に摸倣される傾向が發達して居る。我國に於ても左傾者の間には、勞働者の服裝や、作法や、所作や、言葉までも摸倣する人々が益々増加して居ると思はれる。そうして勞働黨の代議士が燕尾服やフロックコートは云ふまでもなく、モーニングを着用してさへも、非プロレタリア的として非難される傾向がある。又歐米では婦人の服裝に於ては、巴里の女優が優勝性を認められて居るが故に、年々の流行は先づ彼等の間に行はれるもの、或は彼等が推賞するものとして變化して居る。近來我國では化粧に關しては、男女俳優が優勝性を認められて來たが爲めに、化粧品廣告には、彼等の推賞が常に麗々しく掲げられて居る。但し或ドラッグの廣告には、盛んに我國の忠臣義士、孝子の事蹟が述べ立てられて居るが、夫れと痲病や梅毒の藥との間には、どんな關係があるのかは未だ私は研究して居ない。又近來我國の株式相場の變動には、景氣觀測家や投資案内者の言説が、益々重大なる影響を及ぼして來て居ると思はれる。其他私は私が集團的優勝摸倣と稱するものの實例として無數の事實を擧げることが出来るが、此處では只其の意味を一般的に説明する爲めに、

以上述べしが如きものを舉げるだけに止めて置く。但し私は集團的優勝模倣も、結局は個人的優勝模倣に還元されると考へるのである。

次に私が場所的優勝模倣と云ふは、一定の場所に優勝性が認められるが故に其の場所に於て行はれることが、只夫れだけの理由で無批判的不反省的に其儘に全國民間に於て、或は一定の文化圏を作る諸國民間に於て模倣されることを意味するものである。例へば我國に於ては東京が優勝性を認められて居るから、東京に於て行はれて居ることは、何れの他の都市或は地方に於て行はれて居ることよりも、無批判的不反省的に其の儘に、全国的に模倣され易いのである。但し私は一般的には右の如き意味にて、場所的優勝模倣なるものを、一の獨立なる優勝模倣形式として認めて置くことは、便宜であると思ふが、併し徹底的に分析して行くと、夫れは結局は個人的優勝模倣か集團的優勝模倣かに、還元さる可きものと考へるのである。

終りに私が時代的優勝模倣と稱するものは、一定の時代に優勝性が認められるが故に、其の時代に於て行はれて居たこと、或は行なはれて居ることが、無批判的不反省的に其の儘に模倣されることを意味するのである。タールドが一定の方面から見て立てた模倣の二大形式、即ち、慣習 *coutume* と流行 *mode* との區別は、私の見解から見れば、つまり此處に私が時代的優勝模倣と稱するものの根本的區別を意味するものである。第十九世紀の中頃から今日に亙りて、歐米諸國に於ては一般に新しき時代に優勝性が認められて居るから、新しきものが大に尊重され、總て新し

きものは單に新しき時代のもの、新しきものであると云ふだけで、無批判的不反省的に其儘に模倣される傾向がある。尙ほ此の傾向は殊に米國に於て大なるものである。維新後の我國に於ても同様である。但し維新後の我國に於ては、此の時代的優勝模倣と場所的優勝模倣とが相結合し、かくて最新の舶來物が最もよく模倣されて居る。我國の學界にありては、今日でも尙ほ、獨逸に於て最近に唱へ出された學說であると云へば、只夫れだけで無批判的不反省的に模倣される傾向がある。一時我國の社會學界に於て、形式社會學が盛んに喧傳されたのは其の一例である。又近來現實科學としての社會學が喧傳されて來て居るのも其の一例である。右の實例に就て注目すべきは、新しい時代或は現代尊重と外國尊重とが相結合し、古い時代尊重と自國尊重とが相結合する傾向があると云ふタールドの説である。私も一般的には、かかる傾向の存在することを認めてよいと思ふが、併し之れに反する傾向の存在することも認め得られると思ふ。例へば我國では古代尊重が自國尊重と結合せずして、支那や印度の如き外國の尊重と結合して居る場合があり、又歐米諸國に於ても、古代尊重が自國尊重と結合せずして、古代の希臘羅馬の尊重と結合して居る場合があるのである。

私が一般的に區別せんとする四種の優勝模倣とは、大體上右に述べしが如きものであるが、此處に私が特に讀者の注意を求めたいことがある。夫れは私が四種の優勝模倣の實例として擧げしものの中で、純粹なる優勝模倣の實例としてよりは、寧ろ優勝模倣に價值判斷或は評價が結合或

は混交する場合の實例と、見做さる可きものの少くないことである。尙ほ其等の場合は、價值判斷に優勝摸倣が結合或は混交する場合とも見做し得られるので、要するに現實なる具體の場合には於て、優勝摸倣と價值判斷とは種々なる度合に於て種々に相結合或は混交して居るのである。そうして夫れは優勝摸倣と強制或は勢力作用との關係に就ても同様である。かくてアフタリオン教授が現實なる場合に於て、價值判斷中に優勝摸倣を攝取して考察されて居るのも、亦高田博士が價值原理から勢力原理を區別することに於て、アフタリオン教授以上に進まれて居るが、しかも尙ほ勢力作用或は強制の中に、優勝摸倣を攝取して考察されて居るのも、決して理由のないことではないと思はれる。

却說私は優勝摸倣を上述べしが如き四種或は四形式に大別し、夫より各種の優勝摸倣の、普通に通に社會學者間にありては法則と稱せられて居るもの、私が私の科學論上よりして特に志向關係の論理的典型と稱するものを確定し、更に進んで優勝摸倣の生理的心理的及び精神的基礎を究明して、其等の論理的典型を基礎附け、且つ夫れによりて四種の優勝摸倣の交錯を論究し、以て私の優勝摸倣の理論を大成せんとするのであるが、併し此處では此等の諸問題を論究する暇がないから、只以上述べ來りし如くに、四種の優勝摸倣の區別を一般的に説明するだけに止め、終りに優勝摸倣と價值判斷及び強制或は勢力作用との關係を概論して、アフタリオン教授の爲替心理說及び高田博士の價格の勢力說の理論的意義を簡單に評價して置きたいと思ふ。

先づ優勝模倣と價值判斷或は評價との密接なる關係を考察して、アフタリオン教授の爲替心理説の理論的意義を評價するが、上に述べし優勝模倣の實例によりて學ばれる如く、純粹なる優勝模倣は現實的には、只比較的に單純なる場合に於て發見し得られるだけであつて、複雑なる場合に於ては一般に種々なる度合に於て、又種々なる様式に於て、價值判斷或は評價が自から其の中に混交してくるのであるが、夫れと同様に價值判斷或は評價も亦、其の純粹なる形態は、現實的には只比較的に單純なる場合に於て、發見し得られるだけであつて、複雑なる場合に於ては、一般に種々なる度合に於て、又種々なる様式に於て優勝模倣が自から其の中に混交してくるのである。されば現實に觀察される社會現象は、一般に複雑なるものにして、單純なるものは寧ろ稀れであるから、社會現象一般の根本原理として、隨ふて又經濟現象の根本原理として、價值判斷或は評價と優勝模倣とを區別することによりて立てられる價值原理と模倣原理との區別を認めるに至らない人々は、其の複雑な全體を其の儘で評價作用から生まれるものと見て、之を只價值原理のみによりて説明せんとするのは敢て怪むに足らぬ。是れ即ちアフタリオン教授の貨幣心理説や爲替心理説に於ても見出される事態である。同教授が爲替の根本的な心理學的因素として重要視する個人的評定或は個人的評價なるものは、大部分はつまり優勝模倣を含む或は混交して居る價值判斷或は評價に外ならなので、純粹なる價值判斷或は評價ではない。かくて同教授の個人的評定とか個人的評價とか稱するものの充分なる説明或は究明は、只價值原理のみによりて與へ得

られるものでなく、夫れの中に含まれる優勝模倣の度合に、又様式に應じて、適當に模倣原理をとり入れ、模倣原理からも考察することによりて始めて與へられる可きものである。要するにアフタリオン教授は價值原理の外に、模倣原理の存在することを、まだ意識的に充分に洞見して居ないが爲めに、個人的評定或は個人的評價を究明せんとするに當つて、實際に於ては無意識的に模倣原理を應用しながら、しかも意識的には根本原理として只價值原理のみを重要視して居るのであると思はれる。併し又其の無意識的に模倣原理を巧妙に應用されて居ることが、私が始めて同教授の説に接した際、私をして同教授が模倣原理を承認されて居る様な錯覺を、起させたのであらうと思はれる。

私は價值原理と模倣原理との關係から見て、アフタリオン教授が個人的評價或は個人的評定と稱するものを、右に述べしが如くに批判せんとするのであるが、尙ほ更に詳しく同教授の個人的評價と稱するものを吟味すると、其の中には強制或は勢力作用が重要視さる可き場合も含まれて居ることが發見されると思ふ。そうして其の點に於て高田博士の價格の勢力説は、其の獨創性を發揮して居ると思はれる。要するに高田博士は價值原理の外に勢力原理を承認し、之を強調することによりて、アフタリオン教授及び同方針の歐米諸國の經濟學者以上に進み、經濟學の理論に於て斷然頭角を現はされて居るのである。されど本論文(一)の中に指摘せる如く、私は同博士は勢力の概念中に模倣の概念を混交して、まだ兩者を判然區別されて居ないと思はれるので、同博

士はもう一步進んで、價值原理から勢力原理を區別された様に、更に兩原理から模倣原理を區別されることを切望するのである。

抑々模倣原理と勢力原理或は強制原理との兩者の一を特に偏重して、他を排斥せんとする二つの理論が、殆んど同時に現はれ、始めて正面的に衝突して來たのは、タールドの社會學とゾエルクムの社會學との對立に於てであると思はれる。併し第三者からして冷靜に兩者の對立を考察すると、各々其の肯定する點に於て正當であるが、其の否定する點に於て正當でないことが觀破される。そうして勢力原理を偏重せるゾエルクムは、其の後實質的には彼の強制の概念中に、タールドの模倣の概念中に強調されて居るものを段々にとり入れて、彼の強制の概念を修正して居ると思はれると同様に、タールドも實質的にはやはり彼の模倣の概念中にゾエルクムの強制の概念中に強調されて居るものを段々にとり入れて、彼の模倣の概念を修正して居ると思はれる、但し其の度合は、ゾエルクムに於てはタールドに於てよりも一層大なるものと思はれるが、夫れはとにかくとして、結局タールドもゾエルクムも、形式的にはもとの主張を固守しながら、實質的には他の主張を取り入れて、自分の主張を修正して居ると思はれる。そうして此の點に注目することは、雷に社會學に於てのみならず、一切の社會科學に於ても甚だ重大な意義を有することは、私が見て論述し來れる處によりて明白であると思ふ。

現實的具體的現象に於ては、如何に優勝模倣が價值判斷に混交し易きかは、アフタリオン教授

の個人的評定或は個人的評價と稱するものの詳しき分析に於て、上に述べし如くに、明かに觀破されるのであるが、同様に如何に優勝摸倣が強制或は勢力作用に混交し易きかは、高田博士の價格の勢力說に於ける勢力の概念の分析に於て明かに觀破されると思ふ。そうして既に述べし處によりて、價值判斷或は評價に優勝摸倣が混交してくることが、歴史的現實的社會現象の轉化或は發展に於て重大なる意義を有することが學ばれる如く、強制或は勢力作用に優勝摸倣が混交してくることも亦、同じ意味にて重大なる意義を有することが、詳しき分析によりて學ばれるのである。先づ卑近な例を舉ぐれば、奴隸が主人に心服し、主人の爲めには生命を犠牲に供するも、敢て辭しない様にまでなるのは、根本的にはつまり、強制或は勢力作用に優勝摸倣が混交し來りて遂には前者が全然後者に化することによりてであるが、更に重要な例をあぐれば、同一の社會心理的過程によりて、暴力が權力或は權威に、又屈從が忠義に轉化して行くので、尙ほ權力が權利に轉化する場合にも、同一の社會心理的過程が重要な意義を有すると思はれる。

却説是れまでに論述し來れる處によりて明らかなる如く、私は科學的に一切の現實的社會現象を究明する爲めには、只價值判斷作用或は評價作用のみを、隨ふて價值原理のみを重要するものも、亦只勢力の作用或は強制作用のみを、隨ふて勢力原理のみを重要視するものも、亦只摸倣作用のみを隨ふて摸倣原理のみを重要視するものも何れも充分でなく、更に其等三作用或は三原理中の何れかの二つだけを重要視するに止まるのも尙ほ充分でなく、其等三作用或は三原理を總て同等

に重要視し、そして事態に應じて其等三作用或は三原理を種々の度合に於て、又種々の様式に於て、適當に結合しなければならないと考へるのである。併し此處に注意す可きは、社會現象の部類或は文化範域の異なるにつれて、一般的に三原理中の何れかが主位に立ち、他は從位に立つと云ふが如き差異の存すること、及び同し社會現象の部類或は同し文化範域に於ても、三作用或は三原理の結合する割合や仕方が場合によりて種々異なつて居ることである。要するに私は甚だ複雑なる歴史的現實的社會現象の充分なる科學的究明は、從來社會學を始め、其の他の一切の社會科學に於て、一般に考へられて居る様に、比較的單純に成就され得るものでなく、甚だ複雑なる手續を必要とするものと考へるのである。かくて私は爲替現象の科學的研究に於ても、アフラリオン教授の如く、タトヒ實質的には無意識的に模倣原理を應用して居るにせよ、意識的計畫的には只價值原理のみによりて之を究明せんとする以上は、到底充分に其の目的を達することは不可能にして、適當に勢力原理も亦模倣原理も共に適用せねばならないと思ふのである。

最後に私は、高田博士が經濟學新講第二卷中に、價值原理と勢力原理との關係を説明する爲めに作られた一例を、既にさきにも一度引用したものであるが、此處に再び引用して、以て本論文の主旨を簡單に指示して置きたいと思ふ。

高田博士は限界效用說に従ふて供給者の見積る價格と、需要者の見積る價格との關係を左の如くに假定し。

供給者の見積る價格	
10...	1
9...	2
8...	3
7...	4
6...	5
5...	6
需要者の見積る價格	

そうして限界效用説によれば、價格は5と6との間の範圍の中の何れかの一點に於て定まるものであることは、推定されるが、併し其の一點は現實には何れの點であるかは、限界效用説によりては決定されることは出来ないもので、そうして之を決定するものは、ただ經濟勢力關係であると考へられるのである。私は右の例に於て高田博士が、5と6との間の何れの一點に於て、現實な價格が定まるかを決定するものは、經濟的勢力關係であると考へられるに於て、アンタリオン教授の價格論以上に進まれて居ることを認めて、同博士の卓見に敬服すると同時に、供給者の見積る價格と需要者の見積る價格とが、5と6との間に到達する評價過程に於て、既に優勝模倣が作用して居ること、及び現實なる價格が5と6との間の範圍の中の何れかの一點に定まるのも、詳しく分析して行けば、只勢力關係のみによるのではなく、更に模倣關係にもよるものであることを主張せんとするので、要するに私は一切の現實なる社會現象は隨ふて價格も、詳しく分析して行けば、結局は少なくとも價值原理と勢力原理と模倣原理との三原理の種々なる相互關係によりて決定されて居るものにして、かくて其の充分なる説明或は究明は少なくとも右の三原理に基いて遂行さる可きものと考へるのである。但し今後の社會科學の研究の發達は、右の三原理以上の新しき原理を發見するに至るかも知れない。又其の時には今日以上に充分なる説明或は究明が、與へ得られるであらう。(四月六日)